

龍谷大学農学部教授

淡路和則

書評

## 農的社會をひらく

髙谷栄一・著



農業の存在意義を説くには、理論や思想に基づいて首尾一貫した論を打ち出すか、人々の情感に訴えて共感を得るかであるが、本書はこの両方を見事に駆使して、「農」の可能性を描いている。

本書は、市場原理が支配する農「業」では切り捨てられてしまつた部分にも目を向けて「農」という捉え方を示し、農が社會を變革する道筋を描いている。多面的機能を唱える、ありきたりの守りの農業擁護論とは異なり、農の持つ社會デザイン力をダイナミックに説く攻めの姿勢が頼もしい。

原発、戦争、公害、食品添加物などによる「生」の不安、「カネがモノ」をい、効率が徹底的に追求され管理される中で、個人が「生きにくい」と感じる状況が、田園回帰や都市農業の広がり結び付いていると指摘する。

そして、事例を紹介しな

## 攻めの姿勢で「変革」説く

がら、生命原理が最優先され、豊と食によって、人々がつながり、コミュニティーが形成され、循環をベースとした自給圏が形成されれば安心して暮らせる社會になることを説いている。

そのためには地域の条件に合った農の営みが不可欠である。その担い手は大規模経営だけでなく、半農半Xや自給的農家など、多様な担い手の組み合わせが重要であり、さらには誰もが参加できる「皆農」を目指している。大小の石が組み合わさることによって強固になる城の石垣を連想させる。

工業的社會となつて行き詰まった現代社會を、豊かな農的社會へ導く農的社會デザイン力に大いに期待したい。本書は、社會の大きな課題とその解決の道を、深い洞察から理路整然と優しく生き生きと説いており、実に痛快である。

- ◇出版＝創森社
- ◇価格＝1800円
- ◇つたや えいいち 農的社會デザイン研究所代表